

つぶやき



私は日本人じゃないの？ ～教室・地域に残る「満蒙開拓」の“現在”～

長野県教職員組合
子どもと親・教職員の教育相談室

飯島 春光

2023年秋、テレビで「(千曲川) 河川敷ヤミ畑。一体誰が・・・」というニュースが流れました。「中国出身の80歳の男性」「ほかにも不法耕作しているのは中国系の人々」と。

私は地域の中学校で、これらの人々の孫やひ孫を教えてきました。子どもたちも独立して、自身は団地で独り、または夫婦二人で暮らしている帰国者の人々の生活背景には触れず、いかにも「中国人」が不法に耕作していると受け取られる報道に、愕然としました。ネットには、悪意に満ちた書き込みが殺到していました。

2000年に赴任し、中国から来た大勢の生徒たちに会いました。日本人生徒から心無い言葉を浴びせられ、苦しんでいた彼らは訴えました。

「中国では『日本人』と言われ、日本に来たら『中国人』と言われ(差別され)る」。

この叫びにどう応えるか。教師としての生き様を問われ、学年ぐるみの授業を展開してきました。「なぜ身近に中国とつながる級友がいるのか」「その家族はどんな歴史を背負ってきているのか」「日本は中国に何をしたのか」。

学習を通じて、助けてくれた中国人、生き抜いてきた祖父母、それを受け継ぐ自分のルーツに誇りをもって生きてほしいと願いました。

彼らはしっかり受け止め、文化祭で自分のルーツを語り、堂々と巣立っていきました。

しかしまだ地域の中にある偏見をこの報道は浮かび上がらせました。

教え子の祖父は推定2歳で中国人夫婦に助けられ、大事に育てられてきました。40年を経て日本に「帰って」きてからは、日本語が話せないことにより「中国人」と言われ、職場で差別的扱いを受けてきました。ささやかながら河川敷を「開墾」して自家用野菜を作っていることに対して、まさに「犯罪人」であるかのように

テレビで衆目にさらされました。私は悪意の書き込みを誘発しているということも含め、報道のあり方に対し申し入れをしました。

老齢の男性に辛かった過去を思い出させてしまう報道とは何なのか。実際この男性は、訪問した新聞記者に、「私は日本人じゃないの？」と中国語で繰り返しています。

「このニュースひどいよねえ」と、テレビを見た卒業生たちは、帰国者の人々に寄り添う意見を寄せてくれました。中学時代に学んで来たことが力になっていると感じました。

ケースワーカーをしている卒業生は、「中国語を話す患者さんたちのお世話をすることが多いのですが、そのたびに先生の授業を思い出します」「日本語を話せないし、食事合わないので、施設入所もデイサービスも、利用できない人がほとんどなんです」。彼女は中学時代の学年ぐるみの授業を踏まえ、人々の人生を思い、どう援助できるか真摯に 向き合っています。

「残留婦人」のひ孫は「日本語が話せない人の役に立ちたい」と看護師になりました。

学年全体での授業を受け、「私たちはテストでいい点を取るためにこの勉強をしてきたのではない。人間として絶対に忘れてはならない大事な勉強をしてきたのだ」と書いてきた女子生徒のことばは、宝のように私の胸で輝いています。

残留日本人のひ孫である教え子の母親が、言葉の壁に悩む帰国者を目の当たりにして、「中国語 OK」というデイサービス事業を始めました。中国語がわかるスタッフのもと、安らかに一日を過ごす帰国者の姿があります。

帰国者や三世、四世の悩みを受け止め、ともに生活しやすい地域をどう作るか、新たな動きに注目しています。